

# 知って当たり前

## 介護ガイド帳

上原喜光



高齢化社会の現実について、当コラムで2年以上も黙文を書き連ねてきました。これが、これほど、いま、を表や子どもを見守るシステムに現した出来事もないでしょう。90年以

あえて批判的に言うなら、民生委員の人は必ず月

1、2回、声を掛け、老人

になっていたはず。90年以



ミイラ化遺体が発見された家

### 老人の所在不明が相次ぐのは当然だ

足立区で11歳とされていた男性の遺体がミイラ化して発見され、杉並区では113歳の女性の所在が不明になっています。

上続くこの見守り制度が、まるで機能していないという事です。

それにはいくつか理由があつて、まず第一に高齢者と会うには、同居家族や本人の了承が必要。行政や民

生委員が接触しようとしても、05年施行の個人情報保護法の壁に阻まれます。

さらに、近所や行政との連絡を絶つ家族が増えたこと、これは共同住宅内(団

地)でも起こっています。「孤独死」が団地内で起るのも、人との接点を拒否しているという理由もあります。

そして、私が最も心配するのが、隣近所の共助の崩壊です。インタビュされた近所の人、「もう20年もおじいちゃんを見たことがない」と他人事のように話して

私にはあの感覚が分からない。もし私なら数十年も放っておいた自分の無関心を恥じます。

これは行き過ぎかもしれませんが、隣近所の束縛や自治体との接点がないことを「自由」とは言いません。最近、近所に思い当たるフシがあるなら、ドアを叩いて「おじいちゃん元気？」と見に行きましょう。

（全国介護者支援協議会会

私も地方出身者で、帰郷長）

都会は高齢者に対して、公助、共助の限界が来ているのです。